

「切り株と格闘する (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「シェーン」という西部劇映画をご存じだと思います。1953年の作品で、男の子のジョーイ(演ブランドン・デ・ワイルド)が、馬で去っていくシェーン(演アラン・ラッド)に「シェーン!カム・バック!」と叫ぶラストシーンはあまりにも有名だ。



私はこの映画を何度も見たが、その中で、シェーンとスターレット(演ヴァン・ヘフリン)が、小屋の庭にある大きな切り株を、一緒に倒す場面が好きだ。よそ者として警戒されていたシェーンは、この「共同作業」で信頼され、友情も芽生える。ヴァン・ヘフリンは地味な役者だが、「大空港」や「駅馬車」などでも存在感のある演技をしていて、私の好きなアメリカ映画俳優の一人である。

私はこの場面のように、「切り株と格闘」してみたいとずっと思っていた。そして、去年の秋に山荘の庭にある切り株と格闘してみた。



切り株といっても、いろいろな樹種、大きさ、どのような経緯で切り株になったのか、などでいろいろな形態がある。左下の写真は15年以上前に切った、ミズナラの切り株である。ボロボロになって、原形を留めていない。こんなのと「格闘」しても仕方ない。



これは更に古い切り株で、苔むし、すでに地面と一体化し、土に戻ろうとしている様子だ。スコップで割ってみると、ほとんど「麩菓子」のように簡単に割れて、中は「赤腐れ」を起こしていた。



一方、これは屋久島にある「ウィルソン株」1586年(安土桃山時代)に大阪城築城の為に切り出された屋久杉の切り株だという。恐らく「日本最古の切り株」だろう。胴回りは14m近くあり、巨大さでも群を抜いている。私は2009年に屋久島旅行をした時に、このウィルソン株を見学した。有名な縄文杉へ向かう登山道の途中にこの切り株がある。その巨大さに圧倒された。内部は空洞になっていて、祠もあり、人が入ることもできる。実際に見て「どうやって切ったのか」「それをどうやって港まで運んだのか」など、多くの疑問を持ったが、何よりも切られて400年以上たっても、原形を留めていることに驚いた。